The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	プロパガンダのストラテジー : ガルガンチュワの変貌と構成について
Author(s)	鍛治, 義弘
Citation	Gallia. 1983, 21-22, p. 75-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4859
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

プロパガンダのストラテジー
― ガルガンチュワの変貌と構成について ―

鍛　治　義　弘

16世紀前半の西欧は宗教の時代である。エラスムスが準備した新しい運動の機運は，ルターの手によって現実化されていた。フランスにおいても，モーの人々の運動を初めとして新しい宗教への動きが認められる。1530年代に入って著作活動を開始した旧修道会士フランソワ・ラブレーの俗語散文物語にもこうした新しい動きが反映していると思われる。

従来よりラブレーの宗教思想については，多くの研究がなされてきた。しかし，スピッツァー[1]，バフチン[2]のラブレー論の出現後は，安易に物語から作者の宗教思想を抽出し論ずることは許されなくなった。本論は，ガルガンチュワの変貌を中心にすえ,『ガルガンチュワ』において，宗教的様相が如何に表現されているかを探ることにより，即ちレパートリーとしての宗教的様相を一つの意図のもとに向かわせる枠組を求めて，この作品の戦略を明らかにしようとするものである[3]。

ラブレーの作品中の人物，特にガルガンチュワ，グラングゥジエが作者自身の宗教思想を語っていると考える学者は多い。しかし，一体，虚構中に登場した人物たちを作者の代弁者であると単純に考えてよいものだろうか。ラブレーの作品のように一見矛盾した面をみせる場合にはなおさら慎重を期する必要があろう。従って我々が登場人物の言葉から宗教思想を引き出そうとする際には，何らかの手続を踏まねばならず,『ガルガンチュワ』の場合，作者も手順をつくして登場人物を代弁者にしたてあげたと考えられる。以下この手続をガルガンチュワの変化に沿いながら追ってみよう。

産まれるや,「飲みたい，飲みたい」と声をあげたガルガンチュワは既に誕生の折から一定の雰囲気に包まれている。それはこの叫び声からもわかる通り，コミックな雰囲気である。生まれた子供は，あやすのに酒がいり，酒のテーマも同時に提示されている。また，A boyre という分節された言葉によって，この世の光のもとに入ったということは，Rigolot の言うごとく[4]，言語的洗礼を受けたのであり，就中この書物の中に言葉をもって登場してきている。さらに，キリスト教徒の慣習に従って洗礼を受けたと，キリスト教徒として提示される。

こうして『ガルガンチュワ』全体を貫流するテーマ群（言語，酒，キリスト教）を伴い

誕生したガルガンチュワの幼年期は，混沌としてあらわれ，第20章のことわざをかき集めた表現にみられる如く，全く愉快に描写される。これを，ガルガンチュワ自身の言葉から探ってみれば，次のようになる。

—Par sainct Jean! (dirent ilz) nous en sommes bien! A ceste heure avons nous le moine.›

—Je le vous nye (dist-il). Il ne fut, trois jours a, ceans › .

Devinez ycy du quel des deux ils avoyent plus matiere, ou de soy cacher pour leur honte, ou de ryre pour le passetemps.

Eulx en ce pas descendens tous confus, il demanda:

‹Voulez vous une aubeliere?

—Qu'est ce? disent ilz.

—Ce sont (respondit il) cinq estroncz pour vous faire une museliere.

—Pour ce jour d'huy (dist le maistre d'hostel), si nous sommes roustiz, jâ au feu ne bruslerons, car nous sommes lardez à poinct, en mon advis. O petit mignon, tu nous as baillé foin en corne; je te voirray quelque jour pape.

—Je l'entendz (dist il) ainsi. Mais lors vous serez papillon, et ce gentil papeguay sera un papelard tout faict.

—Voyre, voyre, dist le fourrier.

—Mais (dist Gargantua) devinez combien y a de poincts d'agueille en la chemise de ma mere.

—Seize, dist le fourrier.

—Vous (dist Gargantua) ne dictez pas l'Evangile: car il y en a sens davant et sens darriere, et les comptastez trop mal.

—Quant? dist le fourrier.

—Alors (dist Gargantua) qu'on feist de vostre nez une dille pour tirer un muy de merde, et de vostre guorge un entonnouoir pour la mettre en aultre vaisseau, car les fondz estoyent esventez [5].

この場面にはいろいろな笑いの手法がみられる。まず言葉の両義性を武器にした地口が lardez, sens, fondz などにみられる[6]。音の面からみれば，pape, papillion, papeguay papalard などの p の畳韻法があり，セネアンが指摘した如く[7]，aubeliere は museliere との脚韻をねらったものであろう。到る所にあるスカトロジーは説明の必要もないだろう。引用文冒頭における jurement，或いは大膳職，宿舎掛とガルガンチュワとの応答におけ

る意味のとり違えは，1535年B版におけるコミック化の傾向を示すものと言えよう。

こうした数々の笑いの手法の中にあっては，Evangile，pape に関して，諷刺的側面があっても，ごく稀薄に感じられてしまい，ガルガンチュワは民衆的生命力を帯びた言葉を存分に発揮している。コミックの傾向は第12章の torchecul のエピソードにおいて一層の発展をとげ，より多くの笑いの手法が使われ，描写にあっても専ら愉快な面のみが強調される。

笑いのただ中にあるガルガンチュワに対して，グラングゥジエの命により，スコラ哲学者が読み書きを教えることになる。この旧教育が，時代遅れのスコラ亜流式暗記一本槍の教育であることは既に指摘されている通りである。この教育により，ガルガンチュワは，頭がうすのろになるばかりか，あの力強い言葉までも失ってしまう。さらに宗教的側面について言えば，旧教育でおこなわれるのは，内容はなく数だけ多いミサ，連禱などの外形ばかりであり，ラブレーはこれらを数の誇長などで滑稽化している。

全くコミックであったガルガンチュワに，ポノクラートが新教育を施すと，性格が一変し，同時に物語もピクロコル戦争という新局面を迎えるが，この急激な変化を準備するために作者は一つの術策を用いた。

> Pour doncques mieulx son oeuvre commencer, supplya un sçavant medicin de celluy temps, nommé Seraphin Calobarsy, à ce qu'il considerast si possible estoit remettre Gargantua en meilleure voye. Lequel le purgea canonicquement avec elebore de Anticyre et par ce medicament luy nettoya toute l'alteration et perverse habitude du cerveau. Par ce moyen aussi Ponocrates luy feist oublier tout ce qu'il avoit aprins soubz ses antiques precepteurs, comme faisoit Timothé à ses disciples qui avoient esté instruictz soubz aultres musiciens [8].

この Seraphin Calobarsy とはラブレーのアナグラムのもう一つの形であり，作者の介入がここでおこなわれたのである。アナグラムによって主人公たるガルガンチュワの頭脳を清め，登場人物に介入し，その後の登場人物を操ると同時に，物語を自らの手の下におこうとしている。従って新教育化での宗教的側面は，旧教育下とは正反対といってもよいものになる。

新教育下での宗教教育は，朝から聖書の語句を吟味するなど，聖書を中心にすえて，内容理解を核としたものになる。また福音伝道師の説教は聞きに行くが，ミサには一度も行かない。描写の調子にも変化がみられ，スカトロジックな表現は医学用語におきかえられ，笑いの手法を故意に避けているのではないか[9]と思えるほど，生真面目な調子となる。

ガルガンチュワは，ピクロコル戦争以降，『第三之書』『第四之書』においても，古代につい

いての豊富な知識を備えた，賢明な福音的理想君主の様相を呈するようになるが，なによりこの変化は幼児期の豊かな民衆的言語から，新教育を受けた者にふさわしい論理的言語への転換として示される。

‹Il n'y a rien si vray que le froc et la cagoule tire â soy les opprobres, injures et maledictions du monde, tout ainsi comme le vent dict Cecias attire les nues. La raison peremptoyre est par ce qu'ilz mangent la merde du monde, c'est â dire les pechez, et comme machemerdes l'on les rejecte en leurs retraictz, ce sont leurs conventz et abbayes, separez de conversation politicque comme sont les retraictz d'une maison. Mays, si entendez pouquoy un cinge en une famille est tousjours mocqué et herselé, vous entendrez pourquoy les moynes sont de tous refuys, et des vieulx et des jeunes. Le cinge ne guarde poinct la maison, comme un chien; il ne tire pas l'aroy, comme le beuf; il ne produict ny laict ny laine, comme la brebis; il ne porte pas le faiz, comme le cheval. Ce qu'il faict est tout conchier et degaster, qui est la cause pourquoy de tous repceoyt mocqueries et bastonnades. Semblablement, un moyne (j'entends de ces ocieux moynes) ne laboure comme le paisant, ne garde le pays comm l'homme de guerre, ne guerit les malades comme le medicin, ne presche ny endoctrine le monde comme le bon docteur evangelicque et pedagoge, ne porte les commoditez et choses necessaires â la republicque comme le marchant. Ce est la cause pourquoy de tous sont huez et abhorrys [10].

この箇所は修道僧批判の部分になっており，一見して文章の長さが目につく。関係節，名詞節等の従属文によって，会話とは思えぬほどの総合文になっている。猿と修道僧を批判した文が Le cinge 以下ではパラレルに展開されており，comme による例示も滑稽な要素はない。また猿の動作を述べた文では，ne guarde pas la maison, ne tire pas l'aroy という語順であったものが，修道僧についての文では，まず ne laboure が来て，ne garde le pay という語順になるなど，修辞で言うところの交錯的配語法の様相もみせている。Ce est le cause pourquoy de tous sont huez et abhorys は立派な結句となっている。また語彙の面でみても，新教育を受ける前なら，スカトロジックな笑いを誘ったであろう語 merde は，はっきりとした非難の言葉になっている。猿の例自体が滑稽な感じを与えるかもしれぬが，プルタルコスからの借用であることを思えば，むしろ古典への正当な言及と言うべきである。

かくしてガルガンチュワは，幼少期のコミックな雰囲気から作者の介入を経て，福音主義を語る代弁者へと変身した。父のグラングゥジエも，いわばガルガンチュワに合わせて，福音君主の側面を強める。グラングゥジエの部下であるウルリック・ガレも，名前の対比によって巨人族に組み込んでよいだろう。以上で宣教のための戦略については語りつくしたことになるのだろうか。作品全体からみれば，まだ十分ではない。というのもそれでは『ガルガンチュワ』を単なる宗教的パンフレットにしてしまうからだ。ラブレーは作品を単純にしないようまた違った人物を導入した。ジャン修道士がその人である。

ジャン修道士は作品の第二部とも言えるピクロコル戦争で姿を現わし，『第三之書』以降ではパニュルジュ，パンタグリュエルと並ぶ主役となり，この三人の対話により後期の作品は展開する。『ガルガンチュワ』では，多くの形容語に飾られて書物に参入してくるが，これはジャンの場合，ガルガンチュワの如く性格を徐々に発展・展開するのではなく，同時にいくつかの役割を荷なっているからであろう。

ジャン修道士の登場したのはピクロコルの軍勢によりスイイーの修道院が襲われている時であった。この危機に際して，他の修道士や院長は，「行列をして練り歩き」賛歌及び連禱を唱えるだけであったが，ジャン修道士はこれらを一笑に付し，実際的行動に出る。敵兵をよりによって十字架つきの棍棒で殴り殺す行動や他の修道士・院長への軽蔑の能度が示すのは，ジャンが反一修道院主義者として設定されていることである。実際，酒が大好きで，規則などかまわないジャンに，修道士の誓いを守れという方が無理であろう。

しかし，ジャンは反一修道院主義者としてだけ戦っているわけではない。戦争中のガルガンチュワとの酒宴では，パヴィアの敗残兵を罵っているから，ジャンは王のために戦っていることがわかる。ピクロコルがしばしばカール五世に擬せられる以上，ジャンがガルガンチュワ，グラングゥジエら巨人王のために働くことは，当然フランス対神聖ローマ帝国の争いに係わりをもつ。スクリーチの指摘したとおり[11]，ジャンの武器である十字架付きの棍棒に百合の花模様が描かれているのは，象徴的に，ジャンの果す今一つの役割，王党派としての役割を語っているとみてよい。

けれども何にもまして重要なのは第三の役割である。ガルガンチュワとの饗宴での次の言葉を聞いてみよう。

—Feste Dieu Bayart! (dist le moyne) l'enfermier de nostre abbaye n'a doncques la teste bien cuyte, car il a les yeulx rouges comme un jadeau de vergne. Ceste cuisse de levrault est bonne pour les goutteux. A propous truelle, pourquoy est ce que les cuisses d'une damoizelle sont tousjours fraisches?

—Ce probleme (dist Gargantua) n'est ny en Aristote, ny en Alex. Aphrodise, ny en Plutarque.

—C'est (dist le Moyne) pour troys causes par lesquelles un lieu est naturellement refraischy: *primo,* pour ce que l'eau decourt tout du long; *secundo,* pour ce que c'est un lieu umbrageux, obscur et tenebreux, on quel jamais le soleil ne luist; et tiercement, pour ce qu'il est continuellement esventé des ventz du trou de bize, de chemise, et d'abondant de la braguette. Et dehayt! Page, à la humerye! … Crac, crac, crac, …[12]

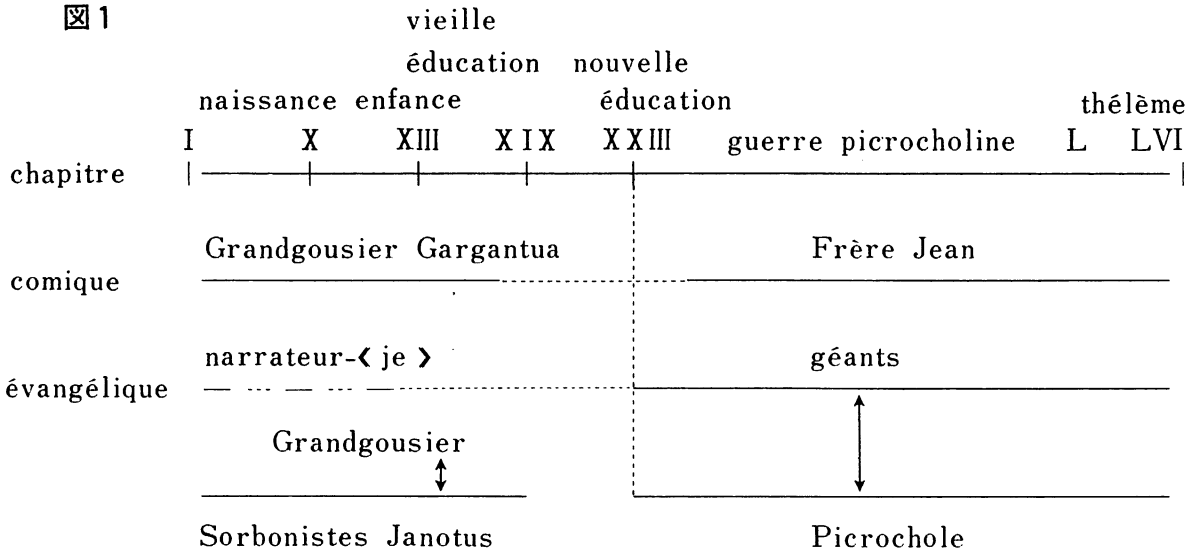
冒頭の jurement に続くジャンの問いに，新教育を受けて福音君主となったガルガンチュワは，すまして古典を参照するが，ジャンはこれに対して，滑稽化したラテン語を折り込みながら，エロティックな解答をする。このように，ジャンは作品の後半において，笑いをひき起こす役を受けもっており，ジャンの登場につれて，juron や言葉遊びが現われ，ジャンの行動もコミカルに描写される。ピクロコル戦争では，巨人王グラングゥジエ，ガルガンチュワは既にみたように福音君主の性格を身につけ，容易に笑いをもたらすことができなくなってしまった。この変化に応じて，笑いを保つために，ジャンが必要だったのである。

さらに，ジャンの役割とガルガンチュワの変化に基づき，テレームのエピソードの解釈が可能になる。テレームは，ガルガンチュワがジャンに与えることからも，作品後半におけるガルガンチュワの福音主義的キリスト君主としての性格と，ジャンの王党派，反一修道院主義者としての立場の上に築かれていることがわかる。テレームの規則は，従来の規則とは反対に定められており，塀もなく，婦人も入ることができ，結婚も可能である。そして，実際的な規則を定めたのがガルガンチュワであり，ガルガンチュワが創立者である以上，本来的にはこの巨人王の僧院なのである。ジャンは，アジールの性格ももつこの僧院を，反一修道院主義者の性格と，王党派の戦う精神において，守護すべく与えられているのである。ガルガンチュワがジャンを認めるのは,「快活で楽しい男」であるからだけでなく,「労苦も厭わず，虐げられし者」を衛るからでもあるのだから。

こうして，今やテレームに表現された思想までも，ガルガンチュワの思想と同列に扱いうるようになった。そして何より，作品後半において，ガルガンチュワの生真面目な主張と同時に，ジャンによる笑いを，矛盾なく受け入れることが可能になるのである。

以上の考察をまとめ,『ガルガンチュワ』全体の構成の中に置き直してみよう。先に,『ガルガンチュワ』の構成を図式化してみると図１の如くなる。

図1



前半部（第23章まで）では，福音的様相は主に「話者を示す—je」によって語られる(第1章，第5章，第8章，第9章)。これらの章では「je」は，他章の場合よりも頻繁に現われ，第5章に典型的にみられる如く，対話者としてvousをひきあいに出し，対話を通して共犯関係に導きながら，宗教思想を語るという構造をもっている。しかしこうした「話者を示す—je」やグラングゥジエによる宗教的様相の表明も，ガルガンチュワの代表する笑いの中にあっては影が薄くなり，前半部は全体として，コミックな相が強くでている。

他方，新教育によって福音君主となった巨人達によって宗教的側面が現わされる後半のピクロコル戦争では，コミックはジャンを中心にして表現される。勿論巨人達がコミックな相を完全に失ってしまったわけではなく，特にピクロコル戦争前半においてはまだ作品前半部の名残りをとどめていた。

コミックな雰囲気に包まれたガルガンチュワから福音を語るガルガンチュワへの移行において，アナグラムによる作者の介入がおこなわれた。後半部は前半部のコミック優勢に対して，福音的側面が強くでてくる。つまり役割分化により一層自由に語ることが可能になったと解される。

こうした前・後半に，それぞれ滑稽化されて，諷刺の対象となっているものがある。前半ではそれをソルボニストとまとめうる。特に旧教育の中に登場するジャノトゥスの存在を考えねばなるまい。後半では，修道僧への批判もみられるものの，中心はやはりピクロコルである。この二人は宗教的にも批判の的となっている。ピクロコルの場合，巨人族が理想的キリスト君主であり，この巨人族に対する形で描かれていることからもそれはうかがわれる。ジャノトゥスについては，ソルボンヌの神学者であり,「異端などは何の造作もなくこねあげてしまいますわい」という言及が宗教的様相を明らかにしている。

ピクロコルにはカール五世を想起せしめるものがあり，ジャノトゥスは，ソルボニスト

であること，はげ頭（カエサル式の頭という記述がある）であること，びっこであること，そして異端への言及から，1530年代前半にパリ大学の反宗教改革的神学者の首領であったノエル・ベダを想い出させる。こうして，前・後半とも実在の人物への諷刺がみられる。

前半がコミックな相を基調とし，後半は福音的面が前面に出てきたことから，『ガルガンチュワ』全体の構成も対照としてとらえうる。最も顕著な例としては，新・旧両教育の対照がある[13]。両教育は内容的にもさることながら，表現においても対照的である。旧教育が何十年もかけた書物を暗記するだけの無駄な教育を，書物を列挙して示したのに対して，新教育は一日の時間割を描き，いかほどエネルギッシュに学問にとり組んだかが語られる。

また第2章と第56章はともにエニグムになっている。第2章が全く混沌の中にあり，解読の手掛りが与えられていないのに対して，第56章のエニグムは，テレームのエピソードの中に置かれ，ガルガンチュワの解釈が付されることにより，福音的様相をのぞかせている[14]。

さらに第7章，第54章は衣服の記述だが，第7章のガルガンチュワの衣服の記述にあっては，色や形ばかりでなく，その重量までが精密に描かれ，笑いを誘うのに対して，テレミートの服の記述では，数字は全く用いられず，ルネサンス期の豊かさへの願望とも解しうるのである。

前半のジャノトゥスの harangue と後半のガルガンチュワの concion，或いはウルリック・ガレの harangue，第12章のガルガンチュワの torchecul に関する滑稽な韻文と，テレームの門に刻まれた碑文の韻文なども対照として考えられる。

この対照による構成はコミックであると同時に福音的側面を語る『ガルガンチュワ』を成立させるものであり，前半のソーセーの広場での大宴会，後半のグラングゥジエの居城での饗宴に代表される酒のテーマが，これらの二面を結びつけている。序詞の出だし beuveurs tres illustres から ジャンの幕切れの言葉 grand chère! まで，酒のテーマは『ガルガンチュワ』を一貫して流れ，主要登場人物たち，グラングゥジエ，ガルガンチュワ，ジャンもこのテーマとともに提示されていた。こうした本文全体の構成は，シレーノスの小箱，ソクラテス，『ガルガンチュワ』の愉快な外面と深遠な内面を対照させて語りながら，バッコス，『饗宴』におけるソクラテスなどによって表わされた酒のテーマで結合されていた序詞の構成[15]と厳密に対応していると言えよう。

『ガルガンチュワ』は決して真面目一方の護教論や単なる宗教的パンフレットではない。かと言ってただ滑稽なだけの本でもない。愉快な外面で人をひきつけながら，宗教的思想も展開するというプロパガンダの戦略も具えた，宗教対立の時代にあっても陽気さを失うまいとしたラブレーの優れた俗語散文物語なのである。

註

(1) Leo SPITZER, *Rabelais et les ‹Rabelaisants›*, dans *Etudes de style*, Gallimard, 1970, pp. 134－165.

(2) Mikhaïl BAKHTINE, *L'œuvre de François Rabelais et la culture populaire au Moyen Age et sous la Renaissance*, traduit du russe par André ROBEL, Gallimard, 1970.

(3) 本論は拙修士論文の一部であり，紙数の関係上宗教思想の内容については触れえなかった。

(4) François RIGOLOT, *Les languages de Rabelais*, Droz, 1972, p.32.

(5) *Gargantua*, Première édition critique faite sur *l'Editio princeps*, Texte établi par Ruth CALDER, Droz, 1970, pp.85－86。以下『ガルガンチュワ』の引用は全てこの版により，*Gargantua* と略記する。なお Je le vous…ceans. はA版における重要な欠如箇所だが，T.L.F. 版の註には何らの指摘もないので，ルフランの批評版（*OEuvres de François Rabelais*, édition critique publiée par Abel LEFRANC et autres, Champion, 1913. 以下 *Edition critique* と略記）をもとに補った。

(6) ルフランの批評版の註を参照のこと。*Edition critique*, p.127, note53; p.127, note60; p.128, note63.

(7) *Edition critique*, p.126, note51.

(8) *Gargantua*, pp.143－144. ただしE版では，やはり檄文事件以降の宗教状勢を反映して，作者との関係を遠ざけようとしてか，Seraphin Calobarsy は Maistre Theodore に変えられている。

(9) 例えばラブレー以外ではごく稀な形 pagine の使用は page との韻を避けるためではないかと思われる。cf. *Gargantua*, pp.144－145.

(10) *Gargantua*, pp.227－279.

(11) M.－A. SCREECH, *Rabelais*, Cornell University Press, 1979, p.172.

(12) *Gargantua*, pp.223－224. A, B版では Feste Dieu…jadeau de vergne が欠如している。

(13) François RIGOLOT, *op. cit.*, pp.69－70.

(14) テレームの中のエニグムにはジャンも解釈を付すが，彼の役割にふさわしく，全く滑稽なものである。そして1542年E版ではジャンの解釈の部分が大きく増加して，この版のコミックへの傾向を如実に示している。

(15) cf. André GENDRE, Le proloque de *‹Pantagruel›*, Le prologue de *‹Gargantua›*: examen comparatif, in Revue d'histoire littéraire de la

France, 1974, n°1, pp.3－19.

(D. 在学中)